令和４年度　学校関係者評価委員会評価報告

日時：令和５年３月25日（土）13:00～15:00
場所：十全看護専門学校
学校関係者評価委員
桃山学院大学教育研究所名誉所員　岡田　千歳
愛媛県看護協会　常務理事　伊藤　千鶴

総評

近年、日本の学校教育は大きく変化の時期を迎えている。貴校でもコロナ禍の影響もあり授業形態もリモートやデジタル教科書の使用を余儀なくされた。また、実習に関しても受け入れ機関である病院や施設への出入りに制限があり、通常の学習を行うことが非常に困難な状況にあった。

この状況は、日本だけでなく世界的な動向となっている。各分野でのIT化やグローバル化、成果の可視化など、インターネットを通じて急速にスピード化し、情報の収集や多様化は目覚ましい勢いで進化し続けている。

こうした動きの中で、貴校は看護専門学校として新しい手法を取り入れつつ、学生たちの人間的成長と難関の国試合格を目指し、従来と変わらぬ素晴らしい成果を上げている。貴校の教授陣の真摯な姿勢に改めて敬意を表したい。

1. 今年度の看護師国家試験合格率は 96.6%(全国平均 90.8%)で、昨年度に引き続き素晴らしい結果が維持されている。コロナ禍で実習が困難な状況の中、個々の学生に対して徹底した教育がなされている成果が表れている。
2. 入学生の基礎学力の格差も年々拡大している。この対策として、課外授業や個別指導で補完している。また、タブレットを活用する等、学習方法にも工夫がみられる点は、教授陣の並々ならぬ熱意の賜物と考える。
3. 貴校の特徴の一つである、教育と医療現場との緊密な協力体制は、教員不足をカバーするばかりでなく、学生にとっても実際に医療現場を間近で学ぶことができ、非常に恵まれた学習環境と言える。今後、積善会グループとしての特徴を活かし協力を得ながら、この協力体制を進めていただきたい。
4. 入学生に対してのアドミッションポリシーで、看護の専門職であり「やりがいのある仕事」であることの自覚を促している。「宣誓式に寄せて」では看護師としての決意、「3年間の学びと成果」では看護観が具体的に表現できている。今後も、段階的で多彩な経験を共有しながら看護観を高めるよう努めていただきたい。
5. 今後の問題

   最大の課題は「学生の確保」である。

   少子化の影響や看護大学の増設、看護職に求められる内容が複雑化していること等、様々な理由により受験者数が減少している。また、近年高校生の進路決定の時期が早まり、年内に決定する場合が多くなった。このため早期の広報活動を行い、学生の確保に努めていただきたい。

   もう一つの課題は「教員の確保（増員）」である。

   この数年、教員数の不足が続き補充が実現されていない。教育の成果を上げるためには、現在の教員数では非常に負担が大きいことが伺える。今後の貴校の充実・発展のためにも、是非、教員の確

保・増員をお願いしたい。

(個々の項目について)

1. 教育理念・教育目的・教育目標

1) 「カリキュラムポリシー」で、入学から卒業まで学習する各項目について詳しく、全体に把握できるようにガイダンスしているのは、非常に良い。

2) 「新カリキュラム」では基礎分野の時間数が減少したが、e-ラーニングの利用やオンライン授業にも対応、臨床指導者が参加した実践・看護事例など、より実践的な指導に繋げられている。

3) 看護研究を段階的に学び、卒業時には「学びの発表会」の場を設けるなど看護観を高めるカリキュラムとなっている。

2. 教育課程経営

1) 教員が不足しているが、複数の領域の講義や担当領域の実習時の対応、学生個々へ対応する等など、教員が協力して教育目標を達成している。

2) 教員不足の対策として、臨床指導者を演習の講師として招くことは負担軽減だけでなく、学生に対し現場の緊張感や実習が効果的に進めやすくなるなど成果が大きい。

3) 臨地実習の教員のアシストを施設側から要求されることが多い。しかし、授業との関係で教員の時間の配分が難しく、非常に苦慮されている。現在の教員数では限界があるように思われる。

4) 最近では、高校の生物学基礎の科目を選択していない学生もいて、科目によっては規定時間数では十分に理解できない学生が出ている。また、デジタル教材や電子カルテなど電子機器使用スキルの習得にも時間が必要となる。課外指導など教員の負担が増えるのが案じられる。

3. 教授学習評価過程

1) 今年度もリモート、DVD、電子教科書などを多用した授業にならざるを得ない状況だが、演習と実習ではかなりの差がある。その点の解決案として、医療現場の方と協力体制で授業を進めている。しかし、教える側も人数が多くなれば、情報の共有、時間配分、内容の重複を避けるなど、事前の打ち合わせを効率よく進める必要がある。

2) 担当科目毎に自己評価が報告されている。達成度の低い項目では、学習方法を分析し、動画テキストの導入やスケジュールの調整等検討されており配慮がみられる。新カリキュラム 2 年次、3 年次の対応を期待する。

3) 学生が主体となって学習できるよう「ルーブリック評価」を取り入れる等、対策を講じられているが、学生の学習習慣が様々であり今後の課題となる。
また、「ルーブリック評価」に関しては、教員、学生、実習機関との共通認識が必要であり、使用に当たっては、事前に十分な理解を得られるよう工夫されたい。

4. 経営・管理過程

1) 貴校は「積善会グループ」として SDGs の達成に向けて、グループ一体となって「地域医療従事者養成」に取り組んでいる。

2) 貴校の受験者数・入学者数が大幅に減少している。また、貴校の校舎が老朽化しており学習環境を整備維持するための体制が必要であり、学生獲得が直近の課題である。

3) 教員の不足を母体病院や関連施設の協力体制によって対応している。サポート体制を維持しなが

ら、教員の確保に努めていただきたい。

4) 学生への支援として様々な学習ツールを活用している。教員・学生と共にその効果を評価し改善する体制があることは良い。

5. 入学・卒業・就職・進学

1) 少子化問題や看護大学の増設等により、貴校の令和 5 年度入学予定者は 21 名(定員の 70%)と年々減少している。今後、「積善会グループ」としてのメリットを Zoom 配信や学校訪問、ホームページ等で周知すること、オープンキャンパス等によって入学者数の確保が必要である。

2) 卒業生のアンケート調査結果からも貴校に対する満足度が非常に高く、また就職率も高い。学生や家族に対する貴校の姿勢がこの素晴らしい結果となっている。今後も継続していただきたい。

3) 就職した多くの卒業生たちと継続的に諸情報を共有し、互いに連絡を密にして、貴校のさらなる発展につながる活動ができればいいと期待している。

6. 地域社会・国際交流

1) 患者さんたちの生活環境、社会環境、地域性などにも目を向けることは、専門だけでなく人間として成長できる大切な分野である。

2) 実際に行われている地域の高等学校主催の「学校防災教育実践モデル地域研究事業」やボランティアクラブ(母子アドバンスクラブなど)に参加することで、地域の人々や年齢の異なった人々との関わりの中で多くの学びがある。今後も活動を続けてほしい。

7. 研究

教員は新カリキュラムへの対応など日々多忙を極めているが、学生指導と共に研究活動も大切な分野である。オンライン講習を受講するにとどまらず、是非今後とも研究活動を続けていただきたい。

各年度に、何人か交代で学会・研究会への参加、研究発表などの機会を作れることが望ましい。